

嘔気——現象学的存在論の探求 (その一)

小川 侃

I 方法への省察 — 現象学的方法

II EkeI 現象の領域

(1) 歩み寄り

(2) 概略とその領域

(3) 不安と嘔気 — その根源性

I 方法への省察 — 現象学的方法 —

吾々は、ここで現象学の定義といったものを述べる気持は全くない。だが、それにしても、一つの現象学的探求を試みようとするものにとっては、「現象学的方法」といったものに触れておくのが、彼の義務であろう。ただオルテガ・イ・ガセットがどこかでいったことだが、定義することはその実いつも暗黙の留保をそと秘めているものなのだ。してみると定義というものは、大して意味のないものか。そうではない。オルテガがいいたかったのは、定義を固定的に受取ってはならぬ、事態への眼を、言葉による定義によって曇らされてはならぬ、という意味であろう。現象学者とは「Anfängerとして、彼のいかなる言葉も、それを新しく問い直し、乗り越えていくための指示と考える者の謂である。」^① 現象学とは、かかる意味で、絶えざる事態との接触である。

現象学的方法とは、「現象学的還元の遂行」とか「現象学的反省」のことである、^② と言い得るが、これでは、単なる言葉の置換にすぎない。現象学的方法とは、通常我々にとって隠されている我々の世界経験を、反省の眼差によって解明することであり、その隠れた意味を顕在化することである。この顕在化の作業は、反省の構えに立ちながら、現象学的還元を遂行することによるのだ。というのは、吾々は通常の生において、世界の事物に結びつけられ、「生活の要求によって押しつけられた偏狭化の習慣をもち、或いは自分の生に対して目隠しをしているから」^③ であり、従って、一層のこと「哲学者は、万人が眺めているものを眺めつづけなければならない」^④ のである。さてフッサールの現象学的還元について実に様々の解釈がひきだされてきているが、このスケッチでは只次の様に言うことにしよう。

現象学的還元とは、何よりも前理論的な、前科学的な世界経験への還帰である。次にそのような経験の「自然の分節」あるいは「アプリアリナ構造」の顕在化である。この第二段階をフッサールは本質直観といていた。吾々はこの両者を現象学的反省と名づけ、第一段階を、エポケー、第二段階を本質直観と理解しておきたい。^⑤ エポケーは、前理論的（根源的）経験に帰るために、我々の先入見・習慣・思惟の習慣・伝統及びあらゆる志向性の糸を切るものである。^⑥

① Landgrebe, Phänomenologie und Geschichte, S. 170

② Bergson, P. M. 153-4

③ A. a. O.

④ vgl. Ha. a. lX.

⑤ 「本質直観」(Ideation)は、普通いわれるような、我々の経験から離れ、独立に存在するアイデアを一距に捉えることではない。むしろベルクソンが語っていたような「自然の分節」の顕在化である。たしかに、九鬼周造博士が行った本質直観への論駁は本質的な点を突いている。(例えば、「いきの構造」P. 13)だが、その本来の意味は構造を、現象の全体性を顧慮しつつ明らかにする所にあるのではないか。いかなる意味でも、吾々は事実をまったく離れたアイデアをみることはないのであるし・フッサール自身、プラトンのアイデアの事物への部分関与を重視していた。(Ha. a. lX, S. 79-80)このことをよく理解するために、本質直観は知覚の上に基づけられているというイデーンの重要な思想を思い起せば、十分であろう。

Ⅱ Ekel 現象の領域

(1) 歩み寄り

「不安」という現象については、キルケゴールとか、更に決定的には、ハイデッカーの現象学的分析がある。だがニーチェが体験し何度も記述したEkelという現象の徹底的解明はなされていないようにおもえる。筆者の管見に入った限りでは、Max Schelerが、恥の感覚に関する論文の中で言及し、Aurel KoInaiが、Ekelの分析を試みている。^①更にSartreが、余りにも有名になったため、敢えて言及するのも恥づかしい位であるが、La Nauséeと「存在と無」第Ⅱ部とにおいて、言及している。我々にとっては、そのどれもが、多くの誤りを犯しているとおもえる。だが、個別的な批判的言及はここでは避ける方が賢明であろう。というのは、吾々は先ず、すべての先入見や理論化や文献解釈以前の、Ekelという現象に反省の眼差を向ける時であるから。批判的言及は、眼を曇らせるであろう。^②

① Scheler, W. W. Nachlaßband I.

KoInai, Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, Bd. X.

Sartre, L'Être et le néant. La Nausée.

なおEugen Finkは、或論文の中で、驚きは、我々人間を日常性における存在者との慣れ親しみの中から追い出す根本的気分であるといっていた。この時、彼は、これに近縁の気分として、Schrecken, Angst, Grauen, Entsetzen, Große Sehnsuchtをあげていたが、ここでもEkelは、その正当な権利を得ていない。

(Eugen Fink, Studien zur phänomenologie, S. 183)

サルトルの《la nausée》については、次のように総括できる。——サルトルにとっ

て、意識という対自存在は、一つの偶然性の彼方への企投をやめることはない。つまり「意識は身体を持つことを止めはしないのである。その時、全身感覚的な気分は、一つの無色の偶然性を、単に非定立的に捉えることであり、事実的存在としての単なる自己把握である。私がどんなに身を振りほどこうとしてもどこまでも私にまわりついて離れない一つの味気ない味わい、私の味であるこの味わいを、私の対自によってたえず捉えること、それこそは私が、別のところでNauséeという名で記述したものである。定かならぬ、おさえがたい嘔気が、たえず私の意識に対して私の身体を頭わにする。」（「存在と無」邦訳、vol. II P. 266）

② なおEkeIをBreachreizから特に区別しておきたい。EkeIは、意識が対象との関係において経験する現象であって、他方、Breachreizは、純粹に生理学的一医学的概念である。前者を嘔気、後者を嘔吐感と翻訳することにした。EkeIとは、存在論的概念であり、直ちに、倫理学と結びつく。困難の多い心身問題には、できるなら触れないでませう、が、いずれにせよ、心身の合一体としての我々の実存に、EkeIは面前してくるであろう。

さしあたって素描を示しておこう。EkeIという現象は、不安等より一層「感覚的」であり、我々を直接にムンズとつかまえる。つまり身体性に結びついている。「不安」が、私を襲う時、例えば夜、床の上で、いつかきっとくるが、しかもいつかは決して示されない「私の終り」に思いを致す時、突如として、私は漠々たる虚無の中にあり、しかも心臓の動きは烈しく速くなる。だから、不安に於ても、たしかに或種の身体現象が伴う。しかし結局の所、この身体性は二次的なものなのだ。何故なら、不安は、いつも想像力によって（Aïain）か、或いは我々の日常的自我の表面が破られるという事態によって、私に到来するからである。人は日常の生に於て、不安のうちにあるのではない。吾々は、習慣・伝統・習俗等といったものによって、社会につなぎとめられているのだ。ここで日常的自我とは、身体をもち、社会化され、世界の内に習慣と習俗と伝統につなぎとめられている自我、ベルクソンのいえば、「等質的空間を受入れる自我」のことである。こういう自我の破れ目に現れる不安は、根源的に、時間性に関っているのは明らかである。——これに対して、EkeIという現象は、身体性に関る。何故なら、嘔気は、私の近くにある或物と私との関係の内に現れるからである。一つのものが、（例えば、腐敗した人間の死体等が）私に嘔気を起させ、それどころか実際に嘔吐することがある。この時、腐肉・腐臭は私をむんずとつかまえ、戦慄させる。^①（「ナポレオンは、セント・ヘレナに流されると知って嘔吐した。」ヤスベルス、「精神病理学総論」上巻、P. 383, 邦訳）ここでは、EkeIという心身の現象と、Erbrechenという生理学的現象との関係を明らかにすることは、我々の立場上できない。只、EkeIは「嫌悪」のもっとも具体的なものである、とさしあたっていっておこう。このもっとも具体的で鋭い「嫌悪」は、視覚・聴覚・嗅覚等に媒介され、私の志向意識に直接結びついている。EkeIを取り除くには、或いはそれを防ぐには、身体を、嘔気を抱かせる

ものから、離れさせるか、感覚を絶つか、である。つまり、少くとも感覚受容器官としての私の身体を取り除くことである。だが、身体は、私の事実性である。——従って、吾々は、身体と意識との合流点、そもそも両者が分たれない点に、身をおいて、分析と記述を試みてみよう。

① Erbrechenはしたが、EkeIは感じなかったということは、ありえない。(純粹に生理学的に吐気、たとえば暴飲暴食の後でも、或種の気持わるさがある。こういう吐気は本論では、シャットアウトする。) ジェームズ・ラング流に、Erbrechenした直後に、私はEkeIを感じた、という事は、意味をなさない。たしかに、Erbrechenという身体現象の発動の後に、「EkeIを感じている私」を、私が認めたかもしれないが、ここでいうEkeIは、それ以前の、不透明で定義し難い《緊張》《或種の嫌悪》(或いは適切には、沈黙している嘔気)のことなのである。

ところで、EkeI—Erbrechenの日常的意味は、体内に入ってくる毒物・害物に対する私の自己保存的な反応である、とかこの毒物を排除しようとする自動機制的運動である、ということであろう。しかしこういう理解は、おそらく、Erbrechenという類似現象よりのアナロジーによるものとおもわれる。ところが本来、ErbrechenとEkeIとは、関係がないのである。

(2) 概略とその領域

吾々は、まず、嘔気の領域を発見するように努力してみよう。嘔気は、嫌悪や軽蔑・嘔吐感・不快・不安・羞恥等々と深い関りをもつが、どういう風に又どの程度においてか、ということについては、さしあたって何ともいえない。いずれにしても、嘔気が「防禦反応」に属するのはたしかであって、このことはもっともよく、嘔吐(毒物の排除)という日常的理解によって示される。明らかに、嘔気は、単なる不快とか気にいらぬこと、といったことではなく、或一つの事態に対する受身の拒否の仕方なのである。ところで、非常に気に入らないものや不快なものについて、「嘔気をする程、不快だ」というが、それは単なる強調にすぎない。というのは、烈しく気にいらぬ場合でも、嘔気を感じないことがある。例えば、反感を起すもの、つまり赤ん坊のしつような泣声等が、そうだ。しかし他方で、腐肉臭のように、かすかであるが、真のEkeIをひきおこすものもあるからだ。だから、本来、不快なもの、気にいらぬものは、嘔気とは基本的関係はない。——他に、例えば、嫌悪感や戦慄との関係にあっては、吾々の国の言葉で、「嫌で嫌で、嘔気をする」とか「鳥肌が立ち、身ぶるいがする程嫌だ」というような言い廻しがあって、嫌悪感を表現する。しかし夜路上で、白いものが浮んでいても、身ぶるいがするし、単に寒い時でも鳥肌が立つのである。^①

嘔気が防禦反応とか不快感を表現する言葉に属することは認められても、だからといって快感を表現する言葉との対応を調べてみる必要はない。快—不快という明確な対応関係が、感情等の中に見出だされる訳ではないからだ。愛に対して、憎をもってきて考察するという仕方は、「沈黙した具体性」(Ha. a, VI, S. 191)を見失っているのだ。愛と憎しみとは根底に於ては対立

する二つのものではなく、シェリングが看破していたように、「あらゆる憎の魂は愛である」からである。(ScheIIing, S. W. VII. S. 401)

嘔気が、いずれにせよ、《気に入らぬ事》や、一般に拒否的トーンをもった感情に属することは、議論の余地がない。しかしそれは不快・嫌悪・軽蔑・不安・恐怖・怒り・憎悪・不気げん・怠屈等々といかなる意味で異っているのか。——不快感の極致が、嘔気だ、として、両者を量的連続的なものと常識は考えている。しかし、これは、日常語で、吾々が単に醜怪なるもの、不快なるものを、《むかつかせる》とか、《嘔気をする程いやだ》ということからの推測であろう。吾々は、単に重要なものを、「これは恐ろしく重要である」というのと、これは同じであろう。不快とEkeIとが、関連はなくてはならないが、EkeIを不快の一種高度なものと考えることはできないことは、既に示した通りである。

嫌悪や軽蔑とは、EkeIは深い関連をもつ。「あたしは、あなたを軽蔑するわ。あなたに触れるとぞっとするわ。……あたしはあなたを軽蔑するのよ。あなたは、私の胸をむかつかせるのよ。」(モラヴィア「軽蔑」角川文庫版、P. 124)とエミリアはいう。軽蔑とむかつきは、共に嘔気現象を構成している。しかし、もちろん、EkeIをそのいずれかに局限することはできない。だが、EkeIが、いかに身体性と結びついた現象であるかも理解できよう。嘔気は、成程、軽蔑・むかつき・嫌悪・触感覚等様々の知覚に足場をおいているが、そのいずれに局限されてもならない。——怒りや憎悪については、前者は身体性に結合し、顔を赤くし、手をふり上げる所作の内に現れるのだが、後者は、身体性は顕著ではない。従って身体性という見地に於て、憎悪は、嘔気とは、余り関係はない。ところで怒りは、顕著な身体性との結合を含んでいる。しかし、狭義の志向性¹の見地に於てみる限り、怒りの発作という現象は、不安の発作等と同じく、殆ど対象志向を保有していないのである。他方軽蔑や嘔気・嫌悪といった現象にあっては、鋭い対象志向が内在している。「私に向けられた彼女の眼には、冷静な嫌悪と……冷たい軽蔑が浮んでいるのに私は気がついた。」(モラヴィア 同書、P. 68)明らかに、嫌悪や軽蔑に於ては、我々の眼差は対象にさく裂するのであって、丁度それは激しい憎悪に似ている。だが憎悪との類似は外面的にすぎない。成程、憎悪の目付とか眼差というものは、一種独特なものがあって、その限りでは、身体性と関連している。しかし憎悪が対象を抹殺しよう、喰い尽そうとするのに対して、嫌悪や軽蔑はむしろ、対象をよく認識し且そこから遠ざかろうとする態度なのである。嘔気は、一層認識的(kognitiv)であるといえる。このことは、ニーチ²が定着した次の様なゲーテ像——ワイマールから、フランス革命の血で血を洗うような進行を、嘔気をもってみつめつづけたゲーテ——とか、あるいは、KoInaiの次の様な分析から明らかであろう。「身ぶるいしたり、嘔気を抱いたりしながら、そこから身を翻し、又嘔吐感が、リアルであれ何であれ、志向的に存在するや否や、嘔気をもよおさせる対象の存在の内に、嘔気や身ぶるい等は、高まり「くらく」色づけられる。しかし、志向のホコ先は、対象の内に突き入り、いはばこれを分析し、その動きと持続の内に沈み込む。従って嘔気には、認識的(kognitiv)な役割が帰せられる」(KoInai, op cit. S. 523) いずれにせよ、嫌悪・軽蔑に媒介され、それらを足場に

している嘔気は、それをひきおこす対象への、私の両義的関りにあるということができる。つまり、一方で、みつめつつ、みきわめつつ、他方でそこから身をそらそう、身を離そうとする。

ここで、嘔気が足場にしている更に二つの契機にふれておこう。前にも言及したことがあったが、嘔気の空間性ともいうべきものである。第一にふれておくべきは、嘔気は、吾々が、有機的なものに面前している時に、立ち現れ得る、ということだ。有機的なもの以外のもの、つまり無機物や非生物は、不安や戦慄（たとえば、パスカルの〈無限の空間〉とか、真空）の原因であることができる。又、私が立ち上ろうとした時、私の頭にぶつかった棚に対して立腹することもある。子供じみた考えは、軽蔑や嫌悪をひきおこす。しかし嘔気は、つねに、生きているもの、有機的なものにのみ関っている。歪んで成長したもの、（セムシ）、身体の火傷等、生きているものが、そのあるべき姿において現れ得ぬものは嘔気を起す。（しかし、例えば、生が全く姿を消してしまっているもの、ミイラ等是不気味ではあるが、嘔気を催させない。）

嘔気について、最後の最も重要な構成契機は、「近さ」である。軽蔑している相手に近よられ、触れられると、むかつくということがよくある。ニーチェは、「人の魂の近づくのをもっとも内面的なものを、あるいはその内臓といふべきものを、・・・かぎわける。」といい、この「潔癖本能の鋭敏さ」を誇っている。「真理を露呈し、嘔と嘔と感じとり、嗅ぎつけたことによって、私の天才は私の鼻孔にある。」（Schlechta 版，S. 1081，S. 1152）しかしここでニーチェが暗に指示しているものは、ニーチェの方法が、EkeI現象に基いていることだ。「病者の光学」は、所謂「潔癖本能」を軸にして、腐臭をかぎわける、そして「かくれているところを見抜く」のである。しかしこのような方法は、——つまり、自から腐りつつあるもの（価値、理想等）をかぎつける——EkeI現象によってのみ基礎づけられる。我々の国の言葉でも、「性根の腐った者」が近づくと、むかつく、といったりする。腐臭と近さとは、単なる比喻ではなく、却って嘔気現象の本質なのである。この「近さ」ということ、これが嘔気現象の解明の導きの糸であろう。これは、私の身体を中心とした、ペルスペクティーヴェの内に構成される「生きられる距離」の内に現れてくる。が、いずれにせよ、この近さは、嘔気のきっかけであるのみならず、嘔気の「共一対象」（ein Mit-Objekt）である。（vgl. Kolua, op. cit. S. 524）近さは嘔気をひきおこす対象と主体との間の掛橋を形成する、つまり嘔気の事態連関である。「近さ」が重要であるのは、例えば、嘔気の感情を想像するときのことを、頭に思いおこせばいいだろう。このとき、吾々は常に嘔気をもよおさせるようなもの、腐敗した死体等をあたかも眼前にあるかのように、その腐臭が私の鼻を刺激するかのように、全く私の身体の近くに表象しているからである。このことは、既に言及したサルトルの嘔気の場合にも当たる。「私がどんなに身を振りほどこうとしても、どこまでも私につきまといてきて離れない一つの味気ない味」（op. cit. p266）、これがサルトルのいう嘔気であり、「この嘔気が、私の意識に私の身体を頭にするのである。」（A. a. O.）意識は、身体をもつことを止めず、これは、偶然的事実存在の自己把握である。ここで、私にどこまでもしがみついてくる私の身体は、嘔気によって頭にされるというのは実は、私の身体の、私にとっての近さが、サルトルを注目させていた

のである。しかしこの意識と身体というサルトル的二元論は気にかかる。我々の態度では、嘔気は又私の身体によって頭にされるのである。私の身体そのものが、すでに嘔気の構成者であり又、嘔気によって構成されるものなのだ。私の身体の働きつつある志向性がなかったら、嘔気は現れ得ない。もちろん反対に、嘔気は、たしかに私の身体を頭にすることでもある。

(3) 不安と嘔気 — その根源性

不安と恐怖とについては、既に多くの研究がある。(キルケゴール、ハイデッガー及びゴールドシュタイン) 彼等は、すべて不安と恐怖とを区別する。

嘔気の問題にとっては、特にゴールドシュタインによる不安現象の記述が示唆に富むと思える。Goldsteinは先行する二人の哲学者の見解をひきつぎ、発展させようとしている。もちろん彼の意図は、生理学と心理学との間で現象学的分析を行うことだ。「恐怖している人は、眼前に怖れている対象物をもっている。」(「生体の機能」邦訳P. 155-6) しかし恐怖をおこすものは、その対象物中にある何か、とかその性質とかいったものではない。同一対象物が、恐怖をひきおこすし、又何とも感じないか、むしろ快を感じることがある。(例えば、ライオンと或ローマの奴隷の場合を想起せよ。)[「だから恐怖を起させるのは、生体と対象物との一定関係の中に介在する何かである。しからば、恐怖の原因とは何か。それは、《不安が起ってくるかもしれぬという体験》以外の何ものでもないであろう。だから、吾々は或対象物を介して、不安が起ってくるかもしれぬということを恐れているのだ。故に不安を恐怖から理解することは不可能だが、その逆は可能である。」(Goldstein, Der Aufbau des Organismus, 邦訳P. 155-6) この故に吾々はゴールドシュタインと共に、不安の根源性を主張したい。——しかし、もう少し詳しく論じてみよう。不安とは、生体が、「危機的反応」(P. 15)を起している場合に、生体が体験するものであり、このとき生体は、周界との間に「秩序ある状態」(P. 15)を維持できない。「秩序ある状態」(P. 15)とは、生体の働きが、恒常的且正確であり、周囲の世界にぴったりと適応しているような、生体と周りの世界との秩序と調和のとれた状態のことである。不安については、多くの初期精神病患者が訴えているように、どこから不安が来るのか分らないし、不安とはむしろ我々の背後から我々を襲い震駭させるものなのである。不安は対象なきもの、無内容なもの、という点では哲学者と精神病理学者との見解は一致しているのだ。恐怖の場合、眼前に、ライオン等、対象が控えている。「このとき、吾々は自己自身をもも対象をもよく意識しており、その対象に対していかなる挙動にでてよいかということも分っており、又現実眼前に存在する恐怖の原因をもたしかめることもできるのだ。」(同書P. 153-4) 恐怖においては、「自己と外界との分離」(同書P. 170)があって、私は周りに対して合目的な防禦反応を示す。又同時に周囲に対する鋭い注意を行う。この時、私は自己の身体性への回帰を強制されているのである。(Vgl. Binswanger, vol II. von der Schizophrenie, P. 96) 反対に、不安にあっては、「世界の強大さ」(op. cit. II. P. 119, Binswanger) が、私を圧倒し、恐怖が "etwas bewußt haben"

(Goldstein, op. cit. P. 169)であったのに対して、それは「Sein-in-der-Welt」の意味をもつ、つまり世界が私をのみこんでしまうのだ。Goldsteinは特に不安状態にある患者の観察から、「剛直して、歪められた表情」「周囲にまったく注意を払わず、何ら合目的な認識もできなくなる。」(op. cit. P. 154)といった特徴を記述している。彼は又、脳疾患者に解決不可能な問題を与えると、不安状態を呈すると報告している。

(op. cit. P. 155)これは患者の「刺激評価能力」が不完全になったためだ、とGoldsteinは考える。この刺激評価能力の不完全性とは、生体が周界にびったりと適応した能作を取ることができぬことであり、後に「抽象的・範疇的態度の欠如」と捉え直したものである。「この患者は不安感をもつが、恐怖には襲われていないのである。このことは彼等が、抽象への障害を受け、そのために将来を見通すことができない、という事実に対応している。」

(Goldstein, 「人間」邦訳, P. 92-5) 抽象的範疇的態度とは、未来を予想し、破局的事態を避けようとする。恐怖においては、人は自我と対象とを共によく意識し、且区別し、外界のもたらす破局的事態(不安発作状態とか死)を避けようとするのである。恐怖とは、この範疇的態度に基づいている訳で、吾々の概念でいえば、「世界を客観化する作用」である。ところで、この態度が消失したり(脳疾・脳傷患者) 或いは未発達(子供)であったり、欠如したり(動物)していると、彼らは、この態度を別の仕方でも補完することによって、自己を守るか、*或いは不安存在であるか、いずれかである。

* ゴールドシュタイン: 「人間」P. 94-7。

「生体の機能」P. 158-9。範疇的の欠如は、恐怖感を患者から、奪い、少しの刺激も患者を直ちに不安状態におとし入れてしまうことができる。それ故、患者は次の三つの仕方によって、破局的事態を避けようとする。

- ① 世界からの意図的逃避=意識喪失。たとえば、自分の力に余る仕事に直面した時。
- ② 「何の反応もしない。」精神的擬死。ニーチェのいう「自己防衛の機略」(Ecce Homo)
- ③ 「常に忙しくなにかをする。つまり「障害を与えられることから、自分を守るような活動をしていること。これによって、不安を避ける。(「人間」P. 94-7)

ところでこの抽象的範疇的態度は、明晰に基礎づけられた概念とはいえない。それによって主体に対立する客観界が構成されるような、主体の客観化作用といっても不十分であって、Goldsteinのこの概念は、しばしば単純な主知主義に逆転していると思える。後にこの抽象的態度について更に分析と基礎づけを試みてみたい。

以上から、とにかく、恐怖とは「不安状態」を避けようとする、冷静な、客観化と抽象化の意識を失わない吾々の態度である。恐怖は、この意味で、kognitivである。恐怖は恐怖の原因をも、たしかめることさえできる。(Vgl. Aufbau. |P|. 153-4) 恐怖において、私は、以前の「不安状態」を把持していて、それを避けようとするのだ、ということは明らかであろう。このために、私はあえて、外界との接触をもとうとさえする。他方、不安において、私は、世界

にのみこまれ、自失している。私は恐怖とはいささかも関係がない。従って、恐怖は二次的であり、不安現象が、体験の地平に於てみる限り、根源的である。

ところで、吾々の主題にもどるべきである。嫌悪 (Abscheu, Mißfallen) と Ekel との関係を分析してみよう。

嫌悪とは、デカルトがいていたように、「目のあたりに存する悪を避けしめる所の動揺を生みだす」ような「強い感動」である。(デカルト「情念論」第89節) 別の所で、デカルトは、「醜いものに向う憎悪」を「嫌悪又は忌避」と名づけている。(op. cit. 第85節。Pléiade, P. 735) デカルトのこれらの概念は、分析も根拠づけも欠いているようにおもえるが、ここにあるデカルトの判断は、それ程誤っているものではない。嫌悪とは、たしかに回避あるいは忌避である。それでは、何を避けようとするのか。「目のあたりにある悪」とか「醜いもの」を避けるのだ、という答では、まだ十分ではない。デカルトは、嘔気と嫌悪との差異に、それ程、注意深かった訳ではないのであって、デカルトの「嫌悪」は両者の混合概念と考えることができよう。我々の「嫌悪」は、眼前の悪でも、醜いものでもなく、嘔気を避けようとするのである。『私は、あなたを、忌避する。あなたが私に近づいてきたとき、私が抱くあなたへの Ekel に耐えがたいから。だから、私に近づかないで。私に触れないで。』(「軽蔑」の女主人公は、「私」(主人公)に対して、このような意味で嫌悪を抱いているのだ。明らかに嫌悪において、私は自分をも、対象をも、十分に意識し、意図的に、嘔気を回避しようと企てることができる。しかし、嘔気現象は、たとえば、症例ブルーナ・テデスキー(神経症的同性愛者)の場合のように、発作的症状を呈示することがある。「男との性的な接触を考えるだけでも胸がわるくなり、時には吐きそうになった。……夢の中に男が現れるときには、彼等は常に胸をわるくさせる程、汚く、性的には貪欲でうすぎたなかった。……」(M. Boss, 「性的倒錯」P. 135, 邦訳) このようなときには、Ekel といえど、不安発作に類似した、人間の全体的存在の動揺が生じる。このような時、既にのべたように、ナポレオンは、実際に嘔吐したのである。従って、例えば、Binswanger の患者であったローラ・ヴォスが、何故、母からもらったすべてのもの、衣裳、肌着、歯ブラシを抹殺せねばならなかったか、が理解できる。明らかに、彼女にとって、母親の使っていたこれらの物品は、自分の近くにあれば、Ekel をひきおこすものであるためである。ローラにとって、これらは、母親そのものなのである。彼女は自己の現存在の完遂の為に、何としてもこれらを抹殺しなければならなかったのであって、Binswanger の「嫌悪と憎悪の重なり合い」というこの症例についての解釈は、支持し難い。(Vgl. Binswanger II, P. 176, 邦訳) このことは、むしろ、嫌悪は嘔気に基づけられているという事態、つまり嘔気の根源性を特徴づけるであろう。

ところで、吾々は一方で、不安の根源性を、他方で嘔気の根源性を頭にした。両者の詳しい分析と解明は、現象学的存在論的究明に依らざるを得ない。後にこの点を明らかにしよう。

(未完)

(京都産業大学講師)